

# 法輪寺の道命阿闍梨

三 保 サト子  
(国文研究室)

Domyo — Ajari of Horinji Temple

Satoko MIHO

## はじめに

長保三年一〇一十一月一日、道命は搥持寺阿闍梨五口の一に補せられた。臈十五、二十八歳の時のことである。厳しい山の修行に耐えた一人前の天台僧として公認された存在になったと考えることができる。前稿では、道命の生涯の第一期、修行時代について考察した<sup>①</sup>。本稿では、搥持寺阿闍梨となつて以後、約十年間の事跡の中から年次を確定できる資料を中心にとりあげ、中年期の道命像を形成していきたい。

## 一 権門、公家との関わり

道命が、公家や貴顕の家での仏教行事に請ぜられている記録の初見は、搥持寺阿闍梨になった翌年、長保四年一〇〇二のことである。十月二十二日から二十五日にかけて、前年閏十二月二十二日に没した故東三条院詮子のための法華八講が催された。『本朝世紀第十六(一条天皇)』に次の様にある。

廿二日癸未。天晴。此日奉<sup>レ</sup>為故東三条院<sup>一</sup>。公家被<sup>レ</sup>修八講<sup>一</sup>。初日也。一条院東対為<sup>二</sup>御堂<sup>一</sup>。有<sup>二</sup>御装束<sup>一</sup>。母后存生御在所也。切<sup>二</sup>件西端南殿東端板敷馬道<sup>一</sup>。為<sup>二</sup>行道之道<sup>一</sup>。左大臣。右大臣。内大臣。大納言藤原道綱卿。權大納言同実資卿。同懷忠卿。(中略)次請僧六十口。入自<sup>二</sup>東中門南脇門<sup>一</sup>。参入。(中略)錫杖十四口。広命。定遠。已上頭。文慶。朝壽。尋清。如源。齊義。道命。円縁。念源。念覺。延政。心著。取円。(下略)

この法華八講は、詮子の居宅であった一条大宮院<sup>②</sup>において行なわれた。三大臣、納言以下の公卿が列席し、請僧六十口を数える盛大なこの法会に、道命はかの如源らと共に錫杖を勤めている(権記、同年九月二十九日条他にも僧名が記されている)。

次いで、寛弘元年一〇四十二月三日には内大臣藤原公季の新写經供養に請ぜられている。

(前略)事了参内府、被供養新写靈山妙經等、院源僧都為講師、請僧山座主、禅林寺僧都、法住寺律師、尋空内供、尋円闍梨、道命闍梨、覺昭等也、

(権記、寛弘元年十二月三日条)<sup>④</sup>

公季は師輔の十一男、天徳元年九五七生れ、長保二年一〇二九月十七日没。右文中にみえる、山座主は覺慶、禅林寺僧都は深覚(公季の同母兄、母は康子内親王)である。法住寺律師は如源(公季息)、この五月権律師に任ぜられたばかりである。招請されたのは、公季の兄弟、息子とその師、血縁に連なる同法たちということであろう。

前掲の二件は、公的な、あるいは盛大な催しであり、偶々記録に留められているが、数ある仏教行事の全てにつき、具体的な僧名まで記録される訳ではないから、これら以外にも、道命らが招請された仏事はいくらかあったことが想像される。また、当時の貴族社会では、家々で私的な法会や加持祈禱が行なわれた。大納言藤原道綱息という出自も当然有効に働いたであろうし、伝えられるところによると法華經読誦の名手であったというから、<sup>⑤</sup>こうした

依頼は決して少なくなかったと考えられる。次の様な歌は、そんな生活の一齣であろう。

わづらふ人の道命をよびはべりけるにまからでまたの日いかか  
ととぶらひにつかはしたりけるかへりごとに よみ人しらず  
ハセ七 おもひいでとふことはをたれみまし つらきにたへぬいのちなりせば

(後拾遺和歌集第十五雑一)

あるところより、ふたゝびばかりめししに、さはることありて、  
まいらざりしかば

二五二 またせつゝよをかさねてしつらさをば いひにはいはずいかゝおもはぬ  
御返

二五三 きみよりはみじかきしなのわれなれば のべやるかたのなくもあるかな

(道命阿闍梨集)

これは品高き人からの要請であった。

この頃、道命の生活はかなり都の貴族社会と密接に結び付いたものになって  
いたと考えてよからう。それは当時の山門僧の通常の姿でもあった。

## 二 尚侍綏子の死をめぐって

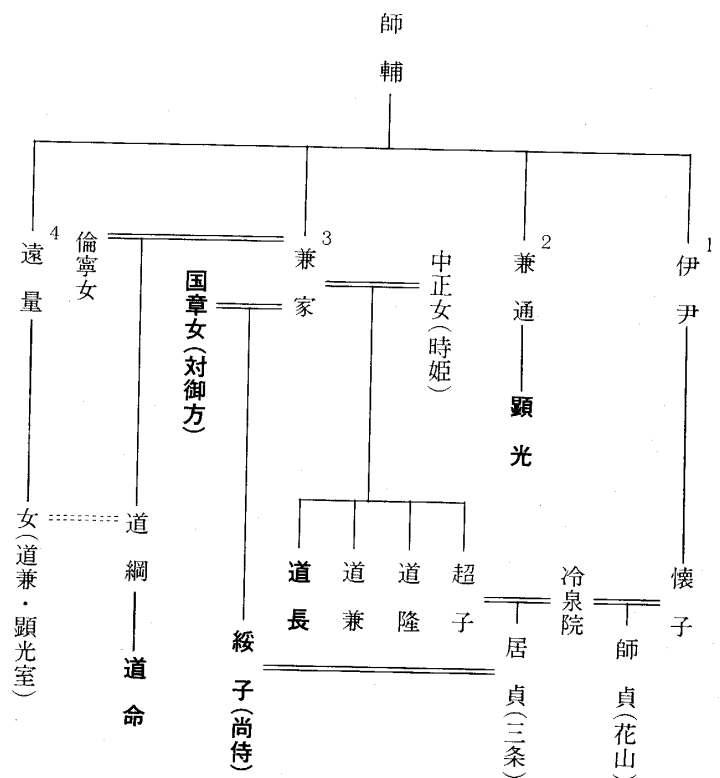
寛弘元年一〇四二月四日、尚侍藤原綏子が亡くなった。道命家集に、こ  
れにまつわる贈答歌が収められている(一二四・一二五、また二二〇・二二一  
に重出)。

故内侍のかみうせ給ての年、桜のいみじうさきちりなどするを、

右大臣殿み給て、たいの御かたにきこえ給ふ

一二四 きみもなきやどにゝはへるさくらゆへ 花のすがたをおもひいづらん  
とあるかへし

一二五 なき人のかたみとおもふ花にさへ ちりをくれぬるみをいかにせむ  
右に見られる人間関係については、田中新一氏が「異とするに足る」とし  
て道命の非道綱的生き方の一証とされた。まず、関係人物の略系図を示して  
おく。



対の御方は藤原兼家の妻妾の一人で、尚侍綏子の生母である。藤原国章の  
女であって、『蜻蛉日記』に見える「近江」なる女性であろうと考証されて  
いる。倫寧女(道命の祖母)は兼家との間に女子誕生を熱望していたので、  
綏子を生んだ彼女を痛烈に憎んでいた。

さて、娘に先立たれて悲嘆にくれている対の御方の許に、右大臣から一二四  
の弔問歌が届いた。詞書によると、右大臣みずから見舞いに訪れたらしい。  
「桜のいみじうさきちりなどする」頃であるから、まだ忌中のことと思われ  
る。問題の一は、この右大臣を誰と考えるかである。また、返歌の一二五は  
道命の作であるが、問題の二は何故、対の御方の返歌を道命が代作したかと  
いうことである。返歌の詞書につき、一二五では右の通りであるが、重出の  
二二一では、「とありける御かへし」とありしに」とあって、道命代作で  
あることがより明確にされている。

「右大臣」について、この部分、谷山茂氏蔵本では「左大臣」とある。寛弘元年の時点で見ると、右大臣は藤原顕光、左大臣は藤原道長である。顕光は、長徳二年九六七年七月二十日に右大臣となり、寛仁元年一〇七三年三月四日、道長の後を襲って左大臣にうつった。顕光の後任は、内大臣であった藤原公季である。道命家集の場合、詞書は必ずしも詠歌時点が付されたとは限らず、みずから手を入れていると見られるので、左右大臣の可能性はこの三者いずれにもあるが、右大臣ならば顕光、左大臣ならば道長とみるのが妥当であろう。「左」と「右」の誤写は容易に起るので、伝本の素性からは優劣をつけがたい。

顕光の父兼通と兼家とは、知られるように極めて不仲であった。その確執は兼通死後も長く尾を引いたから、この一族と兼家妻である対の御方とが親しかったとは考えにくい。右大臣が尚侍の死を弔問するのは当然あり得ることであるが、和歌を贈る交情まではなかったのではあるまいか。加えて、道命の父道綱と顕光との間も通常でなかったことが次の話から察せられるので、道命の代作は右大臣の心情を損なう恐れもあったかも知れない。

一条院御時。喚諸卿於御前渡殿東第一間。立地火爐於清涼殿東廂一庖丁。(中略)大納言道綱進出舞之間落冠。衆人解頤。右府。顯光。有嘲詞。云々。仍道綱卿放言。右府。云々。聽之者或彈指。或嘆息云々。其詞云。何事ゾ。妻ヲバ人ニクナカレト云々。道綱密通右府北方。云々。(下略)

左大臣道長については、この時、対の御方を弔問した記録が残っている。問尚侍母、着服、少将同 (御堂関白記、寛弘元年二月十三日条)

綏子(九七四—一〇〇四)は永延元年九八七年九月二十六日尚侍となり永祚元年九八九十二月九日に東宮(三条)の許に参入して麗景殿尚侍と呼ばれた。長徳年中に源頼定と密通事件を起して自邸に退出していたと言われるが、『権記』(長徳三年十二月十三日、同四年三月二十六日条)などに「土御門ノ尚侍ノ家」とあって、土御門大路に面する邸宅にあったらしい。『栄花物語』によると、道長は病悩の折、この「尚侍の住み給し土御門」に転宅し、平癒したという。(巻第七、とりべ野)。松村博司氏はこれを、長保二年一〇〇〇五月二十六日の『日本紀略』の記事に該当するであろうとされた。道長は綏

子の異母兄であるのみならず、彼女の邸宅に住んだこともあり、綏子やその母と親しかったと思われる。

道命と道長との間はどうかであろうか。道綱は実資の不興輕蔑を買う程に道長に追隨した。道長北の方である源倫子の同母妹を妻に迎え、その妻に先立たれるや、一子兼経を道長の養子にするという工合である。道命の姿勢はおのずから別のものであったろうが、道長にとっては「道綱の息子の一人」と意識されていたのではあるまいか。身分も住む世界も違っているが、代作しても不都合ではない間柄であったと考える。

結局、対の御方がすべき返歌を道命が代作したについては、次の様な事情を想定してみた。一人娘を失って間もない対の御方は、道長から見舞いの歌を贈られて改めて悲しみがこみあげ、とても返歌のできる状態ではなかった。しかし、左大臣の弔問に対して返歌を差し上げないのでは礼を失するというので、その場に居合せた道命に依頼があったのである。道命は血縁の者であり、道長とも面識があるので同座しても不都合はない。前掲関白記で、道長と共に少将頼通が着服している様に、道命も服喪したであろうし、綏子の法要にも奉仕していたであろう。祖母(道綱母)と対の御方との確執は既に昔の話であり、道命の生き方から推して、彼にそうしたこだわりはなかったものと思われる。ここでも、僧として貴顕の屋敷に招請され、場を得ている道命の姿を見ることが出来る。

なお、歌の解釈については、「きみ」「なき人」に誰を充てるかで二通りに考えられる。田中新一氏は故兼家とされたが、綏子とみることもできる。生前、娘が愛していた桜に娘の面影を偲び、その形見として日夜ながめてきたのに、その花も散り急ぐ頃となり我身一つが残り残されていく、その悲しみと焦燥をうたったものである。

### 三 花山院と道命

寛弘五年一〇〇八年二月八日、花山先帝崩御、四十一歳であった。道命の花山先帝との関わりは二十五年もの長きに及んだ。先帝を追慕する一連の哀傷歌からみて、その結び付きが一通りのものであったとは思われない。しかし、

道命が近侍したことを明示する資料は存外に少ない。

道命家集には、東院（花山院）において、あるいは花山先帝の命によって詠まれた歌が二首入っている。

月前に花をおもふといふ題を、花山院よませ給しに

三三 春の夜は月みる空もなかりけり 花のうへのみおもひやられて

四月に郭公といふ題をたまはりて、花山院にて

三四 ひとこゑにおもひをかけてはとゞきす さつきまつまはこゝろそらにも

東院時代、花山先帝はしばしば大小の歌会・歌合を催しているが、年次を確定できるものは少ない。右もその一つである。同時詠とみられる別人の作も管見に入らない。ただ、家集の排列から推すと、寛弘元年詠の可能性が高い。以下、少々脇道に逸れるが、この点に言及しておきたい。

道命の家集は「部立もなく、年序にもよらず、贈答、題詠、偶詠を雑然と集載しているが、おのずから歌群のまとまりを感じさせる部分もある。」と言われる雑纂歌集である。その中であって当該歌（二二二・二二四）は、季節順とみられる一群中に位置している。即ち、二一六から二三四までの二十首（A群とする）、二三五から二六六の三十二首（B群とする）が、各々、正月から順に一年が推移する形になっているのである。いまA群についてみると、ここには、詞書から寛弘元年の作と判明する四首が含まれている。手掛りとなる詞を抄出すると次の様である。

①三七 「正月七日、はるのたつとし、……」

②三〇・三三 「内侍のかみうせたまへるとし、その御いゑに、さくらのいみじうさきたるをみたまひて、……」

③三九 「九月ふたつありしとしの、のちの九月に、……」

整然と排列されているので、恐らく意図的な整理があったものと見られる。二二二・二二四についても寛弘元年のことと考えるのが穏当であろう。二二〇・二二一が三月初めの頃、二二二が三月、二二三が四月の初め、二二四が四月の終り頃、二二五が五月一日と続く。A群を寛弘元年詠とすると（末尾の二三三・二三四の贈答については検討を要するが、同じく寛弘元年作である可能性が高い。後述）

三七 「七月七日に、人々歌よむに」

三九 「九月ふたつありしとしの、のちの九月に、あきすぎてあきありと

いふ題を人々よみしに」

三三〇 「もみぢのこるやまでらに、あつまりていきたりしに」

三三一 「人々あつまりて、あそびなどして、かはりけりてうたよむに」など、人々相集つての歌会、遊宴、逍遙も、花山院の人々との楽しい一刻であったかと思われる。この部分には、寂しい山寺生活を想わせるものがない。

この寛弘元年には、三月二十八日、花山先帝は観音堂へ花見に出かけている（御堂関白記、同日条）。そこで、「尋残花」「遊山寺」の二題を出して歌を詠ませた。詠者は、道長、斉信、公任、長能、それに先帝自身などであったことが知られる。この内、長能、公任の作については、各々の家集中に収められている。宗教面への志向が顕著にみえる前々年、前年に比して、この頃の花山先帝の生活は、文芸活動などに重きを置いた、やや遊興的なものになっていたのではあるまいか。道長との関係も親密である。

なお、前述したように、A群末尾に位置する二三三・二三四を寛弘元年詠とするについては手続きが必要である。以下、この点について検討しておく。

一条院にて、もみぢのちるをみて、禅林寺の僧正の給へる

三三三 もみぢ葉はむかしのいろにかはらねど たゞふるさとゝなるとかなしきかへし

三四 ふるさとゝおもはぬ人の見るだにも たゞにはあらずやどのもみぢ葉ある時、道命は祖父兼家の弟にあたる禅林寺の僧正深覚と同席することがあった。紅葉の散り交う晩秋のことである。深覚は、この一条院が「ふるさと」となるのが哀しいと歌った。一条院は、もと父師輔の屋敷であるから、文字通り深覚の「ふるさと」である。しかし、もしこの時、一条院が皇居として使用されており活気あふれる状況であったなら、「ただふるさととなるぞかなしき」とは歌われなかったに違いない。従って、詠歌時点の一条院はややさびれた状態にある。この条件に合うのは、

①長保五年一〇三〇十月八日、新造内裏へ還宮があってより、寛弘二年一〇五十一月十五日、三度目の火災で内裏が焼け再び皇居として使用

されるようになる間、

②寛弘八年一〇二六月二十二日、一条上皇がこの院で崩御、皇子女・后妃たちが各々の邸宅に退出してより、長和五年一〇二六六月二日後一条帝の遷幸があつて再び内裏となるまでの間、  
のどちらかであろう。

②と仮定した場合、深覚の歌は、今は亡き一条天皇や失なわれた在世時の一条院の華やかさを偲んだ詠となり、一層趣のあるしみじみとしたものに解される。しかし、道命の返歌は、「一条院をふるさとは思わない自分の目にさえも一通りとは思えぬ程美しい紅葉ですよ」とあつて、唯々、紅葉の美しさを讃えるものになっている。②の解に立つと、故院を偲ぶ情を否定したことにもなり礼を失することはなほだしい。①と考えるのが穩当であろう。とすれば、寛弘元年、あるいは二年の秋ということになるが、寛弘元年歌群中の秋に位置することを考慮して元年詠とみるべきものと考える。

この贈答歌については道命家集の成立に関わる問題がある。この詞書は、深覚が禅林寺の僧正となつた寛仁三年一〇九十月二十日以降に書かれたことになり、道命は翌年七月四日には亡くなつていたので、最晩年の頃に手を入れたことにならう。ただ、この部分、谷山氏蔵本には「せちうしの僧正のたまへる」とあつて、やや疑問が残る。

さて、道命が花山院（東院）に親しく殿上していたことは、家集の詞書よりして明らかである。

花山うせさせ給て御さうそうの又の日、殿上にまいりて人もなかりしかばあはれにて

四九 おもひわびくものうえをぞながむれど たちしけぶりのなごりだになし  
花山先帝の崩御は二月八日の夜、葬送は十七日のことであつた。

華山院御葬贈、大和寺東辺云々、雑事用凡人、是遺戒也。

（御堂関白記、寛弘五年二月十七日条）

参院、右將軍右金吾参会、已時陰陽頭吉尚勘申可行雑事日時、仍定雑事、已時作御棺、令別当兼業朝臣告遺詔於外記、去八日夜崩御給、遺詔云、  
挙哀素服忌山陵等可停止之由可令奏、毎事不異凡人云々、（中略）時  
剋昇御棺参入、兼業、為元、正充、師忠、基頼、孝順等朝臣昇之、入棺事入道中納言尋円延円素覺奉仕、（下略）  
（権記、同年二月十一日条）

参院、御葬送亥時也、右將軍右金吾権中納言被参、右將軍有所悩、早以退出、  
（同、十七日条）

辰時帰院、退出、晚景重参、右金吾被参定御法事々、（同、十八日条）  
遺言とはいへ簡素な葬儀であつたらしい。納棺の事は、かの義懷と三人の入道した息子達が勤めた。御棺をかついだのは院の恩顧を受けた薩摩守源兼業、判官代為元などの家司である。道命は野辺送りの煙をながめて先帝との別れを惜しんだ。その翌日、主を喪つた殿上の間はがらんとして人影もない。きのうはまだ御遺体があるに在った。生前はいつも親しい顔が揃つていて道命を迎えてくれた。彼は、そのなつかしい顔の一人に言いやらずにはいられない。

花山の御さうそうの又の日、殿上にさぶらひし人はいひやりし  
五三 もろともいきのふのふべにいざゆきて かすみをだにもみてかへりなむ  
中陰の間、院内はひっそりと悲しみに包まれている。

花山院うせ給ての春、人々あそびもせざりしかば

五九 つらしとや春のさくらもおもふらん しらずがほにてするはるかな  
折しも花の盛りである。先帝存命中であるならば、歌に音楽に墨染の袖の目立つ院内も明るいさわめきに包まれているであらうに。先帝と共に惜しんだいくつもの春が思い出される。

以言朝臣持来御願文、即自奉書、持来、自大僧正長仁、御許有書状、天道賜命三年云々、子細見彼御書状、参院御法事、導師叡久僧都、呪願慶円僧都、三礼穆算僧都、読師尋光律師、唄院源僧都、散花林懷律師有法服、公卿参入五人、（下略）  
（権記、寛弘五年三月二十二日条）

七七の御法事が取り行なわれた。右には道命ら殿上法師の名は記されないが必ずや参会していたことであらう。院に残っていたわずかな人達も今日を限りに各々の屋敷に退いてしまう。「花山院」の消滅である。

花山の御いみはて、人々をのくになるに  
六二 そのかみのこゝちのみしてありつるを けふよりそらをながむべきかな

## 四 道綱と道命

寛弘六年一〇九冬、道命は父の屋敷で催された歌合に出詠した。萩谷氏が「寛弘四―七年」冬傳大納言道綱歌合」とされたものである（平安朝歌合大成）。田中氏はこれを更に、道命家集の排列組織より推して寛弘六年と限定された。今、これに従う。該当歌は次の六首である。

或所に歌合するに、神祭と云題を

九六をとめごがをふるをふりのもろ声は 行く末遠き人も聞くらん

千鳥

九七夜半にくる人もあるかといでてみよ まへの川べに千鳥なくなり

おなじ

九八千鳥なく浦へはゆきもやられぬを いかなる波の立ち返らん

（詞脱、あられか）

九五玉の緒の乱れたるかと思えつるは たもとにかかるあられなりけり

又これは右のかたに

一〇敷妙に高嶺の雪やとけぬらん みぎはまされる山川の水

あるところに月を

二九三ふゆの夜の氷のひまのあらませば ふりさけ月をながめましやは  
この歌合の出詠者としては、既に長能が指摘されている。『千載集』（巻六）

に「傳大納言道綱の家の歌合に、千鳥を」とする一首が、また、桂宮本長能集に「いつれのとしにか、侍（傳）殿歌合に」として、千鳥、氷、雪、月を詠んだ計四首（七九―八二）が収められている。道命家集で「或所」というのが道綱の家を指すことも、これによって知られた。

この歌合には更に、和泉式部も出詠していた。和泉家集に次のようにある。

十二月、人のもとよりよみにをこせたりし

雪

三三五雪ふればみやこのうちもよみながら みなしほ山の心地こそすれ

氷

三三六をとたかくたぎりてをつる滝つせの みつは氷もあへずぞ有ける

冬山

三七ちりはてゝ人はたになきふゆ山は 中く風の音も聞えず

神祭

三八神山ときかきをさしていのかな ときはのかぎりいろもかへじと

千鳥

三九今朝きけばさほのかはらの千鳥こそ つままどはせる声に鳴なれ

電

三〇竹のはにあられ降なりさらくに 独はぬべき心地こそせね

水鳥

三一けをさむみあしのみぎはもさえぬれば 流るとみえぬ池の水鳥

右詞書によると、十二月であること、「人のもとよりよみにをこせたりし」とあって歌を詠進する形の参加であつたらしいことが分る。ここでも「人」とあって道綱の名は出てこない。

一体に道綱の評価は低く、思慮の浅い凡庸な人物と見るのが定説のようである。しかし、赤染衛門も和泉式部も彼を語るに足る相手と見ていたらしく、親しく交際している。和泉式部の場合、帥宮亡き後、寛弘六年春の末から葵祭の頃までに中宮彰子の許へ出仕しているので、この歌合の頃は彰子女房であつた。和泉家集には次の様な贈答も収められていて、彼女は道綱に「哀をしれる人」と呼びかけている。

おなじころふのとのに

三三四さるめみてよにあらじとやおもふらん あはれをしれる人のはぬは

ふのとのより

三五袖ぬれていづみといふなはたえにきと 聞しをあまた人のくむなる

返し

三三六かげみたる人だにあらじくまねども いづみてふなのながれ斗ぞ

又おなじ殿より、東宮のなをたゞにかゝせて

三七をとのみなくしのをかの郭公 ことかたらはんきくやきかずや

その御ふみをかへしたれば、また

三三八人ゆかぬみちならなくなにしかも いたゞのはしのふみかへすらん

かへし

三九なをやめにみかへさるゝ。をはたゞのいたゞのはしはこぼれもぞするこの贈答が交されたのは、「おなじころ」（そちの宮うせ給ひてのころ）のことである。真陰な恋をしている訳ではないが、道綱は、宮を喪った痛手が幾分慰められるかと期待させる話相手ではあったらしい。長能は無論のこと、和泉式部も道綱と極く親しい人物であったことが知られる。道命もこうした内輪の一人として道綱家歌合に出詠したものであろう。

道命は道綱の第一子であるが、二人の関わりを示す資料が乏しいこと、互いの生き方に大きな違いがあることによって、疎遠な父子であったと推測されている。道命が花山先帝に親寧していることは、退位劇に役果した道綱との距離を大きなものと印象付ける。田中氏は、二人の関係を示す唯一の資料としてこの歌合出詠歌を挙げられ、「道命はこれをあえて『ある所に』と秘めての書きぶりをみせている点が注目される……加えて……道命は歌作こそすれ、方人として列座したものでないようである。」として、「どうしても、祖母とも父ともひどく疎遠な道命」と結論された（注(8)文献）。

確かに道綱と道命とは生き方を異にしており、親しい父子ではなかったようである。その点では従うべき見解と思われる。しかし、家集の詞書については、この箇所のみならず、「人」「人々」「ある所」「あるやんごとなき所」「ものへ詣づる」の如く、個有名詞を記さない場合が多い。道綱家歌合だけが特別ではないので総合的に考えていきたい。また、「方人として列座したものでない」と云々の条について、和泉式部も歌のみを詠進したと見られ、むしろ、道命家集の一〇〇などは右方に肩入れするための歌であって、直接その場にあったことを思わせる。この歌合が催された時期、道命は父の屋敷にも出入りしており、一応の交りが結ばれていたと見るのが自然ではあるまいか。

なお、右に引いた道綱と和泉式部との贈答中に、「東宮のなをただにかかせて（一三七詞）」とみえる「なをただ」について付け加えておきたい。『権記』（長保六年正月五日条）に、従五位下に叙された「春宮少進藤尚忠」の名が見えている。これが東宮の尚忠であろう。東宮（居貞親王、後の三条帝）の傳である道綱は、部下の少進尚忠を語らって式部への恋文を書かせ、

彼女をからかったものと思われる。この尚忠はまた、道命家集にも登場する人物であり、山寺にある道命をたずねている。即ち、家集一四五に、「山寺に侍しに、なをたかゝもとより、四月つごもりがたに、かくいひたりし」とあり、これが『後拾遺集』（夏部一八一）によって藤原尚忠であると知られるのである。

更に、「花山法皇東院歌合」に出詠参加している「直忠」も同一人物かも知れない。この歌合は、萩谷氏が「正暦年間九〇—九九四」と位置付けられ、今井氏が「長徳末から長保初年以降と推定」されたものである。直忠につき、萩谷氏は加賀介藤原吉信の男「尚忠」とされ、今井氏は曾根好忠ではなからうかとの案を示しておられる。

こうした辺りにも道綱と道命、更には和泉式部、花山先帝をも結ぶ線がありそうである。

道命が道綱邸に出入りしていたと見られる別の資料に次がある。

右近大将道綱の家に人々小弓射てあそびける時、まかり侍らで  
申し遣しける 贈法印慈応

一八〇〇 梓弓居てもかひなき身にしあれば 今日の日居にはづれぬる哉  
返し 道命法師

一八〇一 梓弓君しまとゐにたぐはねば とも離れたる心地こそすれ

（新拾遺集、雑中）

道綱邸で小弓の会が開かれ、僧俗集って楽しんだものらしい。慈応は、たまたま所用があつて欠席したのであろうが、そのあいさつを道命に送っている。小弓会に慈応を誘ったのは道命であり、無論、彼自身は参会したのである。慈応については詳らかでなく、贈答の時期についても不明である。道綱の右大将在任は長徳二年十二月二十九日より長保三年七月十三日までのことであるが、「贈法印」との作者名表記は後代的なものであろうから決め手にはならない。

道命の家集には、「をば」「はらから」「いもうと」など肉親の死に際して詠まれたものが少なくない。僧という立場上、肉親に限らず人間の死に関わる機会が多いのは当然であろうが、そこで注目されるのは道命の情の深さである。儀礼的なところや悟りすましたところが見られず、感情を素直に歌っ

たものが多い。次の如きもその好例である。

いもうとのうせ給へるいみし<sup>本定</sup>の程、つれづれなるに

一四三 はかなさはよのつねとてもなぐさめつ こひしきをこそしのびわびぬれ

日ごろすぎて、ゑなどわらひがちなるにつけてもあはれなれば

一四三 なくなみだいかでとめむとおもひしを とまるもまたぞかなしかりける

道命は妹の忌に籠っている。人の世がはかないものだとは常に口にもし、よく承知しているつもりなのだけれど、やっぱりこみあげてくる恋しさをどうする術もない。ところが、何日かすぎてみると、あれ程つらくて恋しくて、何とか止めたいと思っても次から次へとあふれていた涙が、いつの間にか出なくなり、食べたり眠ったり、あまつさえ声をあげて笑ったりしている。そんな自分にはとする。人間というものはこういう風に出来ているのか、とても忘れられないと思つたものを忘れ、何事もなかったように生きていくのかと思う悲しさ。素直な情味のある歌である。

道命は、早くより出家し、道綱とは親しい父子ではなかったかも知れない。しかし、それだけに一層、肉親の絆を求める気持ちが強く、それが肉親に限らず友人や恋人やを求める気持ちともなつて、家集に色濃く表われている人恋しさの表白につながっている様に思われる。

## 五 法輪寺の道命

道命の住房があつた法輪寺は寺史が明らかとはいえず、道命がどういう経緯で何時頃ここに入つたのかも詳らかでない。今、『角川日本地名大辞典26、京都府上巻』から引いておく。

法輪寺 八西京区V

京都市西京<sup>北しぎ</sup>区嵐山虚空山町にある寺。真言宗五智教団。智福山と号す。本尊は虚空蔵菩薩像。寺伝によれば和銅六年元明天皇の勅願によって行基が創建したという。のち空海の弟子道昌が一木に虚空蔵像を刻んで安置し、寺名も葛井寺から法輪寺に改めた。(中略)「枕草子」「梁塵秘抄」「源平盛衰記」などにも当寺についての記事が見え、著名な霊場であつたことがわかる。(下略)

右の説明には道昌の名が見えており真言宗の寺であつたことを窺わせるが、天慶年間に空也上人が参籠の時、勧進によって旧寺を常行堂として修造したとも伝えるので、この頃より天台宗寺院となつたものであろうか。少なくとも道命の時点では天台宗であつたであらう。叡山文庫や三千院円融蔵には「嵯峨法輪寺勧進帖」も残っているという。

斎藤熙子氏は平安中期の法輪寺について次の様に指摘される。

清少納言は、枕草子「寺は」の段に、法輪寺をあげている。しかし、この頃、文学にこの寺があらわれることは、さして多くない。

法輪寺が、和歌にあらわれているのは、勅撰集では、後拾遺集が最初である。私家集は赤染、道命の家集以外では重之子僧集、和泉式部集、公任卿集、道済集にみえる。

用例数は、赤染二十三首と道命約二十首を別格として、後拾遺集二例(内一例は道済集のもの)の他は各一例にすぎない。『枕草子』では、「寺は壺坂。笠置。法輪。靈山は、釈迦仏の御住みかなるがあらはれるなり。石山。粉河。志賀。」(岩波大系所収本、二〇八段)とあり、この「法輪」は地理的にいつて大和の御井寺ではあるまいか。また、『小右記』『権記』『御堂関白記』にも法輪寺参拝の記事は管見に入らない。寺としては、さして重要視されておらず、嵯峨野逍遙や大井川遊覧のついでに立ち寄る程度の寺であつたかと思われる。ただ、この辺り一帯は古くより秦氏によって治水が行なわれ、平安遷都以後、大堰への行幸が盛んとなり、遊覧の地としてしばしば利用されてゐた。道命の時代には、公任の逸話で有名な三船祭なども始まり、早くより橋(渡月橋。法輪寺橋の名も見える)がかかつていたこともあつて、いわゆる都の内との往来も比較的自在であつた。都と適度の距離を保ちつつ自由な隠遁生活を営むには好適の地であつたと思われる。

赤染衛門集に収める法輪寺詠の内、早い時期のものであつて注意されるのは源倫子(道長妻)一行の参詣である。

殿の上法輪にまうでさせ給へりしに、月のいとあかきりしに、すかたの弁

一四四 西へ行月をしたひてこし程に ふかき山にもいりにける哉  
女房この月をみたまふらんやとありしに



一四五をちにみし山の此方に見る時も 月にはあかん夜もなかりけり

なりまさ、つねふさの中將など、ふえなとふきあはせて、とよらのてらのとくちずさびたまへる、ところがらにやいとおかし、こよひのやうなる夜またありなんや、いみじきよのさまかなと、

相方弁

一四六 忘れん身をば思はずをぐら山 今宵の月を思ひいでなむ

とありしに

一四七 君をこそまづはしのばめをぐら山 月にぞ月のこひしかるべき

斎藤氏はこれを赤染が匡衡と共に尾張に下向する以前、即ち、「長保元、または二年の秋か」と推定された。この頃の法輪寺が、倫子の参詣を促す程度の魅力をもつ寺として認められていたということであろうか。

長保初めの頃、ここに道命が在住したかどうか、また、倫子の参詣が道命と関係あるかどうかは分からない。ただ、その可能性を探ってみると、道綱が長保元年頃までに倫子の同母妹と結婚しているので、倫子と道命とは案外に身近な存在であったかも知れない。長保元年頃、道綱女の豊子は彰子の許に出仕している。

倫子の伴をした赤染は、この後しばしば法輪寺を訪れるようになった。道命と赤染との交遊が何時頃始まったのかは定かでないが、赤染は若い頃、道綱と噂の立ったこともあり（後拾遺集八八三）、早くから道命の存在を知っていた可能性がある。道命家集には赤染の名は記されていない。しかし、彼女に贈られた歌が入っている。花山先帝哀傷歌群（五九―六五）中に見える一首（六三）が、『後拾遺集』（一九九）にあって、「五月ばかり赤染がももにつかはしける」と詞書された二首の内の一首である。他の一首（一九八）は赤染家集にもあり「五月朔日ころ、あざり」と詞書されている。この花山哀傷歌群を認めるならば、六三の郭公の歌は寛弘五年の贈答となり、彼らがこの頃までに親しい友人づきあいを始めていたことになる。

次に公任の法輪寺詠についてみる。

ほうりんじにまうで給ふ時、あらし山にて

① 三九 朝朗嵐の山のさむければ ちる紅葉をきぬ人ぞなき

ながたにくれなぬのかといふは、（中略）紅葉のいとめで

たき比、中納言の御もとより

② 四五 おもひやる心だにゆく紅葉を 見せてちらすな風のかせかへし

③ 四六 名にたかき岡のあらしはさむからじ 紅葉のにしきみにしきたらば公任家集の詞書によると、①は嵐山の紅葉を、③は長谷ぐれないの丘の紅葉を歌ったものであるが、この二首は道命家集中の一首に酷似しており、公任の影響が指摘されている。次の様にある。

もみぢをみて

④ 五 みにきたるかひこそなければからにしき きながらかせにあてじとおもへば

おなじ事なめり

⑤ 六 をぐら山あらしのかぜもさむからじ もみぢのにしきみにしきたれば

人にまた

⑥ 七 おぼろげの色とや人のおもふらん をぐらの山をてらすもみぢば

もみぢしたるきのもとに

⑦ 八 紅葉のはしたなきまでちりしきて かぜさへあかむこちこそすれ  
①と④⑤との対応は、単なる言葉の類似ではなく、法輪寺紅葉符における同時詠ではないかというのが私案である。時は晩秋、嵐山は目にしみるばかりの全山紅葉に染めあげられている。公任の歌がまず詠み出され、道命が④でもって唱和する。他の参会者達も口々にその美しさを讃え、行く秋を惜しむのである。道命の歌は、こうした場を想定してみると生きてくる。④から⑦は全てこうして詠まれたものではあるまいか。⑤はまた、公任集の③と同語、同発想である。一方が他方の歌を意識して、故意にそれを使ってみせたと考えるべきであろう。

①は『拾遺抄』及び『拾遺和歌集』に採られている。抄の成立を長徳三年頃とする説に従うなら年次推定のできる法輪寺詠としては早いものになる。道命はこの頃より既に法輪寺に縁があったことになろうか。下旬「ちるもみぢばをきぬ人ぞなき」が『拾遺和歌集』採録の際に「紅葉の錦きぬ人ぞなき」に変えられたことについては花山先帝及び周辺歌人の流行用語の如きものを想定できるかも知れない。

②③は公任と長男定頼（九五―一〇四五）との贈答である。定頼の年令、及

び、公任が出家隠栖した北山長谷に於ける詠であることを勘案すれば、法輪寺の道命詠を公任が使った可能性が高い。

道済については道命との直接的交渉の跡がたどれない。彼の法輪寺詠は

法輪にまうでゝ、かれこれうたよみにし

三九としごととせくとはすれどおほるがはむかしの名こそなをながれけれの一首である。桑原博史氏の年次推定によれば、長徳四年九九八歌群に位置する。道済は長能と共に『拾遺和歌集』撰集に助力したと言われるので、右詞書の「かれこれ」の中に花山院周辺歌人を想定することもできるが、想像の域を出ない。ただ、この頃、法輪寺参詣の好士達が、大井河辺を散策し歌を詠むといったことが行なわれていた証となる。

ともあれ、道命は凡そ長徳から長保にかけての頃、縁あって法輪寺に住房をもつことになったらしい。当時、僧侶は都の内に屋敷を構えることが許されておらず、車宿りなどの名目で邸をもっていたという。道命の場合も、貴顕からの招請がふえ、都に滞在することが多くなるにつれて、そうした必要が生じたかも知れない。先に山を下りた花山先帝と院の殿上人達の宗教活動、文芸活動の様を見聞きするにつけ、あるいはその一員として東院に上がるにつけ、もっと自由な境涯に身を置くことを望んだのかも知れない。天台阿闍梨の枠から出るわけではないが、文芸や恋や親しい友との交わりをこよなく大切なものと感じていたらしい彼の生き方が、法輪の地を選ばせたように思われる。

次に、こうした道命の生き方について、もう少し考えてみたい。

家集から浮かんでくる道命は、説話の中の道命像とは大きく違っている。かつて稲賀敬二先生が「道命俗物観」なる論を書かれた。私は先生の平安文学研究会で道命阿闍梨集に出会い、その後、何度かこの集を読む機会があったが、彼に対する印象はもう少し好ましいものであった。家集中の歌は技巧的で機知に富んだ言語遊戯的色彩が濃かったが、一面、人恋しさに溢れており、ものにこだわらない温かい人柄が感じられた。いつも相手と同じ高さに立っており、教え導く姿勢の強い僧臭さといったものが見られなかった。

家集に次の一首がある。

いちまつりごとみて、人くのかのよのことおもひやりしによめりし

三四はかなくも人のうへにて見ゆるかなあのよこのよのへだてばかりに「いちまつりごと」は現行の辞書類に見えない語であるが、『御堂関白記』（長和五年五月二十七日条）に用例がある。

庚午、此日市政也、着彼所令檢非違使等、免景参<sup>（免）</sup>レ、仰、致行家濫行者至孝及入日記三位中将家下人三人令追捕

右頭注に「著鈇政、至孝及ビ能信ノ下人ヲ追捕セシム」と記す。また、右の歌は『万代和歌集』第十五雜歌二にも入っていて、「着駄政を見て」と詞書がある。即ち、「いちまつりごと」は「着鈇政」であると知られる。

着鈇政は、平安時代、東西の市において五月と十二月に行なわれた檢非違使の行事である。鉄製の鎖で足をつなぐ枷が「鈇」であるが、これを罪人の足につけ、三四人をつないだまま使役した。花山天皇も在位中の寛和二年五月十七日に密かに御覧になったという。道命らが連れ立ってわざわざ見物に出たのかどうかは分からない。罪人の事とはいえ、その様子は哀れで、話に聞く地獄図を見る気持ちにさせられたのであろう。道命の歌は決して他人事と見ていない。来世では我身の上に待っているかも知れない境涯と観じているのである。

『枕草子』に道命の話が入っている。そこでは「だうめいあざり」と記されており、阿闍梨に補されてより後の記録とみられる。『枕草子』は増補、加筆の部分が寛弘年中のものと言われているので、この逸話が事実を伝えるかどうかは疑問としても、かかる話に対して道命が一首詠んだということは、この時期の道命を語るものとして興味深い。

右衛門の尉<sup>（そ）</sup>なりける者の、えせなる男親<sup>（おとこおや）</sup>を持たりて、人の見るにおもてぶせなりと、くるしう思ひけるが、伊予<sup>（いよ）</sup>の国よりのぼるとて、浪に落し入れけるを、「人の心ばかり、あさましかりけることなし」とあさましがるほどに、七月十五日、盆<sup>（ぼん）</sup>たてまつるといそぐを見給ひて、道命阿闍梨

わたつ海に親おし入れてこの主の盆<sup>（ぼん）</sup>する見るぞあはれなりける  
とよみ給ひけんこそをかしけれ。

この歌は清輔の『続詞花集』では、巻二十戲咲に入っている。『枕草子』でも清少納言は「と詠みたまひけむこそ、をかしけれ。」と結んでおり、深

（岩波大系本、三〇七段）

刻さや残酷さは感じていないようである。しかし、道命の感想は「あはれなりける」であって、決して、その行為を非難したり、愚かさを嘲ったりしたものではない。そういう愚かしい人間に対する一種の共感が、「盆を見るぞあはれなりける」であったと考えられるのである。

### おわりに

道命が家集の整理をしたのはいつの事なのか。一気に書き下した創作とは違って歌反古の整理によって編集された私家集の詞は、あるものは元々のメロをそのまま使い、あるものは一部手直しし、またあるものは新たに書くといった風であろうから、不統一が生じるのが普通である。現在と過去の言い方も混在するし、書き手の立っている時点や心境の違いが表現に影響を与える。従って、出来上った形のもを一律に解釈することには無理があろう。そうした制約の中であえて言えば、晩年のことではあるまいかと考える。

先に「禅林寺の僧正」の呼称から、少なくともこの詞書については晩年の寛仁三年末から四年入寂までに付されたと推定したが、次の様な詞も、事があつてから相当年月を経ていることを示しているように。

四四 詞 これはよしなしごとなめり

五〇 詞 だいわすれにたり

一四 詞 これは、やうの、さうくしければくなくめり

また、詞書を見ると、歌が詠まれた「時」を限定するために、住んでいた「場所」で表示することがある。道命家集では、その言い方に次の三通りがある。

①（法輪）にある（侍る）ころ

②（法輪）にありし（侍りし、なりし）ころ

③（法輪）にありける（侍りける）ころ

場所としては、「法輪（寺）」「山寺」「大原」が使われ、多いのは法輪である。これまでの人生を振り返って見た場合、彼にとって、法輪寺在住時が、印象深い一つの時代として意識されていたことを示しているように思われる。

注(1) 拙稿「道命法師伝考―飯室妙香院をめぐって―」（『源氏物語の内と外』所収、昭和62・11、風間書房）

(2) 『増補国史大系9』所収。

(3) 一条院 一条南大宮東二町、謙徳公家、「拾芥抄」とあるもの。師輔から長男伊尹へ、その婿の為光へ、その女の「寝殿の上」へと伝領され、これを佐伯公行が買取って東三条院詮子に献上した。

(4) 『増史料大成』所収。以下同。

(5) 『本朝法華驗記』（下、第八十六、天王寺別当道命阿闍梨、『今昔物語集』）

(6) 『新国歌大観』第一巻、勅撰集編（昭和58、角川書店）

(7) 拙著『道命阿闍梨集』（昭和55・10、和泉書院）による。但し、必要に応じて濁点を付し、底本の誤脱を補ったところがある。

(8) 田中新一「道命阿闍梨の伝記的考察」（『国語国文学報』第四十二集、愛知教育大学、昭和60・3）

(9) 坂口玄章「蜻蛉日記人物考」（『国語と国文学』九巻六号、昭和7・6）

(10) 「一四四これは、やうの」「一六四これは、やうよみたりし」「一四四これは、よしなしごとなめり」「五〇だいわすれにたり」などに明らか。

(11) 『新訂国史大系18』所収。

(12) 『大日本古記録』所収。以下同。

(13) 『栄花物語全注釈二』（昭和46・5、角川書店）に次のようにある。

長保二年五月二十六日条に

左大臣家法華八講、依リテ 病悩ニ也。五、六月之間、東三条院并ビニ 左大臣久シク 煩ヒタマフ 重病ヲ。

とあるものに該当するであろう。（巻第七「とりべ野」の補説）

注(8)に同じ。

(14) 今井源衛『花山院の生涯』（昭和43・7、桜楓社）、第四章の七「歌壇的活動と交友」に詳しい。

(15) 『私家集大成』（中古Ⅰ）所収、「道命」の項解説。

(16) 長保四年には書写山行幸、観音堂行幸と参籠、親密であった為尊親王の死去と法事など。長保五年には東院に院源僧都を招いて説教講筵を開くなど。

(17) 神原家本和泉式部集統集（『私家集大成』中古Ⅱ）による。

(18) 上村悦子「和泉式部考」（『王朝女流作家の研究』、昭和50・2、笠間書院）注(6)に同じ。

(19) 例え「今昔物語集」（巻十一、本朝付仏法）に著名な寺の伝が列記されているが、『秦川勝、始建、広隆寺語第卅三』『建、法輪寺語第卅四』と見出しのみで本文を欠いている（諸本欠）。これは記述の時点で既に分明でなかったことを示すのではあるまいか。なお、岩波大系本頭注では、この法輪寺につき、大和国生駒郡斑鳩町の御井寺を指すとするが誤りであろう。

(20) 『図書総目録』による。未見。

(21) 『赤染衛門集再考―法輪寺詠をめぐって―』（和洋国文研究、第15号、昭和54・12、和洋女子大学国文学会）

(22) 『百鍊抄』貞応二年十月十六日条。

(23) 『百鍊抄』貞応二年十月十六日条。

(24) 『百鍊抄』貞応二年十月十六日条。

- 25) 神原本赤染衛門集(『私家集大成』中古Ⅱ)による。  
26) 書陵部蔵大納言公任集(『私家集大成』中古Ⅱ)による。  
27) 『拾遺抄』(卷三、秋、一三〇)。(注⑥文献所収)  
あらしの山のもとをまかりけるにもみちのいたうちり侍りければ  
右衛門督公任朝臣  
あさまだきあらしの山のさむければ ちるもみちばをきぬ人ぞなき  
『拾遺和歌集』(卷三、秋、二二〇)。(同右)  
嵐の山のもとをまかりけるに、もみちのいたくちり侍りければ  
右衛門督公任  
あさまだき嵐の山のさむければ 紅葉の錦きぬ人ぞなき  
28) 書陵部蔵道済集(『私家集大成』中古Ⅰ)による。  
29) 「源道済について」(文芸言語研究、文芸篇、第九卷、一九八四年十二月、筑  
波大学文芸・言語系)  
30) 和歌史研究会々報、昭和52・5

(昭和六十二年十月三十一日受理)